

4. 日本史

4.1. 織田信長

織田信長は、1560年、尾張に侵入してきた今川義元を桶狭間の戦いで破り、1567年には、美濃の斎藤氏を滅ぼし、肥沃な濃尾平野を支配下においた。稲葉山城を岐阜城と改名し、「天下布武」の印判を使用した。また、天下を自分の武力によって統一する意志を明らかにし、翌年信長の力を頼ってきた前將軍の弟足利義昭をたてて入京、將軍職に就けて、全国統一の第一歩を踏み出した。やがて信長と対立した足利義昭は反対勢力を組織しはじめ、信長の天下統一に反抗したが、信長は、1570年に朝倉義景・浅井長政の連合軍を姉川の戦いで破り、1575年には、病死した武田信玄の子勝頼の軍を長篠合戦において大敗させた。これは足軽鉄砲隊を使ったものとして戦史上名高いものである。

補足:

墨俣城…信長に仕えていた頃の秀吉が1566年に築いた。信長が斎藤龍興を攻める際の前線基地で、秀吉が短期間に築き「一夜城」の異名がある。

安土城…信長が1576～79年にかけて築いた城で、近江国(現在の滋賀県)の琵琶湖東岸にあった。

長浜城…豊臣秀吉が大阪城に移るまでの根拠地である。

足利義正…室町幕府第8代將軍で、銀閣寺を建てるなど、東山文化の中心となった人物である。

足利義輝…室町幕府第13代將軍。

足利義昭…室町幕府第15代將軍。室町幕府最後の將軍となる。

三方ヶ原の戦い…1572年に遠江(静岡県)で起きた、武田信玄と徳川家康の戦いで、信玄が勝利し、家康は浜松城に逃げ帰った。

山崎の戦い…1582年に本能寺の変を起し信長を襲った明智光秀を、羽柴秀吉が山城国(京都府)山崎において討ったもの。

賤ヶ岳の戦い…1583年、近江の賤ヶ岳付近において、羽柴(後の豊臣)秀吉が柴田勝家を破ったもの。

小牧・長久手の戦い…1584年、徳川家康が織田信長の子信雄を援助して、羽柴秀吉と戦ったもの。勝敗はつかず、講和を結んだ。

4.2. 幕末の動き

4.2.1. 生麦事件

1862年、薩摩藩の中心人物島津久光一行が江戸からの帰途、その従士が生麦で、行列を横切ったイギリス人4名の非礼をとがめ、1人を斬殺、2人にけがを負わせた。翌年、薩摩藩とイギリス艦隊との間で薩英戦争が起きている。このとき、薩摩藩はイギリス艦隊の大砲など近代兵器の威力を知り、以後、攘夷論を改めた。

4.2.2. 桜田門外の変

1860年、水戸・薩摩浪士らに桜田門外で襲われて殺害されたのは、大老の井伊直弼。

4.2.3. 坂下門外の変

水戸浪士らに襲われた安藤信正。

4.2.4. 八月十八日の政変

1863年8月18日、薩摩藩と会津藩は、**尊王攘夷派**を京都から追い出そうとした。

4.2.5. 池田屋

新撰組が尊王攘夷派の志士たちを襲ったのが池田屋である。

4.2.6. 公武合体派

朝廷と幕府の融和を目指していた。

4.2.7. 寺田屋

坂本龍馬の常宿で、龍馬が襲われて危うく難を逃れたことでも知られる。

4.2.8. 新撰組

隊長は近藤勇。副長は**土方歳三**。

4.2.9. 四国連合艦隊の襲撃

長州藩は1864年、藩兵を上京させて勢力の回復をはかろうとしたが、薩摩、会津両藩と戦って破れた。これに対し幕府はただちに長州出兵の軍をおこした。一方、**イギリス、フランス、アメリカ、オランダの四国連合艦隊は、長州藩の下関砲台を攻撃した。**

補足:

- ・**倒幕派** 長州藩…関ヶ原の戦い以来の**反幕府勢力**。**吉田松陰、高杉晋作、木戸孝允**(桂小五郎)などが活躍し、**尊王攘夷派の急先鋒**であった。その後、イギリスなど外国勢力と結び、攘夷思想を捨て、幕府を倒すことを目指した。
薩摩藩…長州藩とならぶ**反幕府勢力**。**島津久光、西郷隆盛、大久保利通**などの人物がいた。**1866年、坂本龍馬の仲介で長州藩と同盟し、倒幕を目指した。**
- ・**佐幕派** 会津藩…徳川家との関係が深く、**藩主の松平容保が京都守護職などを務めた**。最後まで幕府側として戦い、**戊辰戦争で新政府軍に敗れる**。**白虎隊の悲劇**でも知られる。
新撰組…京都守護職松平容保の指揮下に置かれ、**京都で尊王攘夷派を取り締まった**。剣術者の集団で、**近藤勇、土方歳三、沖田総司**らが中心となる。規律が厳しく、内部粛正が多かった。

4.3. 江戸幕府の将軍

4.3.1. 第3代将軍徳川家光(1623～51年)

武家諸法度の発布、参勤交代の義務づけ、軍役の賦課など、**将軍への権力の一元化を推進し、法制・職制・兵制などの諸制度を整え、幕藩体制を完成させた**。また、**キリスト教の禁教**を強化し、**鎖国令**で貿易を管理した。

参勤交代の制度:大名が1年おきに家臣を連れて江戸にのぼって将軍に会うという制度。

4.3.2. 第4台将軍徳川家綱

保科正之、松平信綱、酒井忠勝らの補佐を受け、末期養子の禁の緩和、殉死の禁止など武断政治から文治政治へと転換した。明暦の大火で江戸の大半が消失すると、それを契機に、江戸をその急速な成長に合わせて拡張、再開発した。

4.3.3. 第5台将軍徳川綱吉

大老堀田正俊の補佐のもと文治政治を行うが、後に側用人柳沢吉保らを重用した。戦国以来の武力によって上昇を図ろうとする価値観を、**生類憐み令と服忌令**により、社会全体の価値観ごとに変化させた。

服忌令:父母や親族が死んだときの忌引などの日数を定めた法令のこと。

4.3.4. 第8代将軍徳川吉宗

幕政改革を行い、年貢の増徴、新田開発、倹約などにより、逼迫した幕府財政の立て直しを図った。また、官僚機構の整備、目安箱、小石川養生所、町火消の設置を行うなど、政治、経済、社会全般にわたる政策を展開した。

幕政改革: 享保の改革。

目安箱: 投書箱の一種。

公事方御定書: 吉宗の政策の代表的なもの。

4.3.5. 第11代将軍徳川家斉

松平定信を登用し、寛政の改革を断行させたが、松平定信の退陣後は、将軍または大御所として政治の実験を握った。貨幣改鑄が経済活動を活発化させ、文化は一気に爛熟化し、江戸を中心に享楽的な化政文化を生んだ。

4.4. 日本の銀行の歴史

4.4.1. 国立銀行条例公布

1872年、渋沢栄一が中心となってアメリカのナショナル＝バンクの制度に倣い、政府は国立銀行条例を公布した。この条例は、発行銀行券の正貨兌換を義務づけていたので、民間銀行の設立はわずか4行にすぎなかった。そのため、政府は1876年に条例を改正し、発行銀行券の正貨兌換の義務づけをやめた。すると、商人・地主や華士族の設立希望者が殺到した、という経緯がある。

4.4.2. 日露戦争

日露戦争で日本は勝利したものの、ロシアから賠償金を取ることはできなかった。きわめて厳しい戦いであったため、ポーツマス講和会議でも、日本は戦勝国でありながら、あまり強気には交渉できなかった。また、日本の金融制度が確立したのは、日露戦争よりも前である。

4.4.3. 日本の銀行の歴史

1919年から貿易の輸入超過、1920年の株式市場の暴落を口火にした戦後恐慌、1923年の関東大震災で経済は大きな打撃を受け、銀行手持ちの手形が決済不能となった。銀行は日本銀行の特別融資で一時をしのいだりしたが、その後も不況が続いて決済は進まず、1927年には、取付け騒ぎが起こって銀行の休業が続出した。

4.4.4. 1920年代の日本の経済の動き

不況で失業者が増え、東北地方などの農村は惨状をきわめ、欠食児童や娘の身売りなども珍しくなかった。そして、労働争議や小作争議が急増、政党や財閥を非難する世論の声が高まっていった。

4.4.5. 財閥解体

財閥の持株会社の解散、財閥家族・同族による支配の廃止が目的。1947年11月、過度経済力集中排除法が定められ、鉱工業や配給・サービス業などの財閥系企業が排除の対象となったが、銀行はその対象外であった。なお、独占禁止法は1947年4月、成立。

4.5. 幕末から明治維新までの出来事

4.5.1. 大政奉還(1867年10月)

江戸幕府第15代将軍徳川慶喜が、政権を朝廷に返上したことをいう。これにより、250年以上続いた江戸幕府が終わった。しかし徳川慶喜は政権返上後も新政府で強大な実権を握る考えだった。

4.5.2. 王政復古の大本令(1867(慶応3)年12月)

明治天皇により布告。王政復古とは、幕府に委任されている政権を朝廷に返上すべきであるという政治思想。大久保利通、西郷隆盛、岩倉具視ら倒幕派は、徳川慶喜が大政奉還後も政治の実権を握ることを警戒、王政復古の大本令により、慶喜を新政権から排除した。

4.5.3. 五箇条の御誓文(1868年3月)

明治天皇が神に誓う形で発表。「古い習慣を改め、世界に目を向け、新しい日本をつくっていく」という、**新政府の基本方針**を示す。

4.5.4. 版籍奉還(1869(明治2)年)

大名に支配されていた領地(版)と領民(籍)を朝廷に返上すること。しかし、その後も藩は存続し、藩主も知藩事(知事)として残ったので、新政府の中央集権体制は徹底されなかった。

4.5.5. 廃藩置県(1871(明治4)年)

中央集権化を徹底する政策。藩を廃止し、府県を置き、旧藩主の知藩事の職を解き、新たに府知事・県令(県知事)を任命した。これにより、新政府の権限が全国に行き渡るようになった。

4.6. 第二次大戦期の日本

4.6.1. 日中戦争

1937年の盧溝橋事件を発端として、日中戦争が勃発した。

満州事変: 柳条湖事件(1931年)が発端。

4.6.2. 日独伊三国軍事同盟

日本は1940年にドイツ、イタリアと日独伊三国軍事同盟を結んだ。

日独防共協定: 1936年

日独伊三国防共協定: 1937年

4.6.3. 太平洋戦争

1941年10月に成立した東条英機内閣は太平洋戦争を開始した。

近衛文麿内閣: 日中戦争

4.6.4. 対日経済封鎖包囲網

日本の南進政策に対し、**イギリス、中国、アメリカ、オランダの4カ国による対日経済封鎖包囲網がとられた。ABCD包囲網とも呼ばれた。**AはAmerica(アメリカ)、BはBritain(イギリス)、CはChina(中国)、DはDutch(オランダ)をあらわす。

4.6.5. ポツダム宣言の受諾

1945年、戦争の終結を図るために鈴木貫太郎内閣が成立し、ポツダム宣言の受諾を決定した。

4.7. 遣隋使と遣唐使

日本は隋に対して上位に立っていたわけではなく、対等の立場に立とうとしたのである。「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」で知られる国書は、聖徳太子が隋の皇帝煬帝に宛てたもの。煬帝はこの手紙を見て、無礼であると激怒した。

吉備真備は遣唐使。717~735年にかけて唐に留学した。真備は菅原道真と並ぶ学者政治家として知られる。

高向玄理は渡来人の子孫で、飛鳥時代の学者。608年に遣隋使の小野妹子らに従い、留学生として隋に渡る。大化の改新後、新しい政府の国博士となり、654年に遣唐使として唐に渡り、長安で死去した。

遣唐使の渡航は航海・造船技術の未発達もあり非常に危険であったが、阿倍仲麻呂や藤原清河のように帰国できず唐朝につかえて一生を終えた者もいた。

894年に遣唐使が廃止。隋王朝は短命で581～618年まで、2代の皇帝と38年で滅んだ。また、遣唐使を廃止したことによって、中国の文化が流入しなくなり、そのかわりに日本の貴族たちが、それまでの文化を日本人の好みや生活に合わせていく工夫を行い、国風文化と呼ばれる日本独自の文化が発達した。

遣唐使は唐に多くの留学生・学問僧を送り出しただけでなく、多くの唐僧の渡来にも貢献した。鑑真はその代表で、戒律を伝え、日本の仏教発展に貢献し、後に唐招提寺を開いた。